地獄の飼い主

クリーム

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

結構ヤバめの術式を持った男の子のはなし

目次

ハジマリ ―― 1
ハジメマシテ ―― 7
リョウイキテンカイ ―― 15
シキガミ ―― 22
フジサン ―― 27
ナラク ―― 32

ハジマリ

「え？呪霊が一切いない地域？そんなのあるわけないじゃん。何いってんの」

伊地知潔高は先日、窓から受けた奇妙な報告を自分の前に座っている目隠しをした自分の先輩に報告していた。

「ええ、私もそう思い二級術師と共に現地に足を運びました。しかし……窓の報告通り呪霊の存在を確認できませんでした…」

「ふーん、そこで僕の出番ってことね…」

「はい、お手数ですがお願いします」

「いいよ、面白そうだ」

五条悟は新しい玩具を貰った子供のような笑みを浮かべた。

■■■■

「ホントに呪霊がいないんだ」
　伊地知から報告を受けたその日に件の場所にやってきた。
（成る程、この地域に住む誰かの術式が無意識に発動してるのか…しかし地域一帯を範囲にして発動し続けても無くならない呪力量…使ったそばから回復してるのか、それともあまりにも多いのか、いずれにしろ接触はしておかなくちゃね）
　地道に歩いて探すかー、と立っていた電柱から飛び降りすれ違う通行人をその目で探る。

「見つけた」
　小一時間ほど歩き回り何か飲み物を飲もうと自販機を求めて公園に入ったところ、目的の人物を発見した。
（うーん、凄まじいね。呪力量に関しては立てた予想が二つとも的中してるとは思わなかったけど…術式がかなりヤバイ、今すぐ保護しなくちゃいけないレベルだ）

六眼を通してまだ少年と呼べる男の子を見ると呪力量より術式の方に目が行った。
（さっさと制御しなくちゃ余計なものまで溢れでるかもしれない。そうなったらこの地域どころか日本が危険だ）
そう考えた五条はベンチに腰掛け空を眺めていた少年に接触しようと近づいて行った。
少年は五条に気がつくと変な物を見るような目を向けてきた。それもそのはずだ、１９０を越える全身真っ暗な目隠し男が自分の方に向かって歩いて来るのである、変な物を見る目で見るのも仕方がない。
「やぁ少し時間いいかい？」
「ええまあ」
「なら良かった。じゃあ早速本題ね君、昔変なものが見えなかった？」
「変なもの？……見えましたね。急に見えなくなりましたけど、それが何か？」
「うん、関係するの今から話すことに」
「へぇ～僕も気になってたので是非教えて貰えるとありがたいです」
「じゃあ少し長くなるけどごめんね。あ、その前に僕は五条悟、よろしく」
「あ、はい。僕は小野武比古（おののたけひこ）です。よろしくお願いします。」

■■■■

「別の世界の話のようです」
「まぁ日常生活ではまず聞くことなんてないからね」
　武比古にある程度説明し終えた頃には夕日が沈む直前であった。武比古は少し目をぱちくりとさせた後、疲れた～と伸びをした。
「もうこんな時間か、送っていくよ家族が心配するといけないから」
「大丈夫です、直ぐそこなので」
「そう？なら後日もう一度伺うよ色々説明しなくちゃならないしねご両親にも」
「わかりました、今日は色々ありがとうございました五条さん」
「いいよ、僕も久しぶりに楽しかったし」
　じゃあね、と公園の出口に向かって歩いていく五条。
（あ、そうだ最後にこれだけは伝えないと）
　１８０℃方向転換して武比古の方に戻ってくると、武比古の身長に合わせるように片膝をつき、目隠しをとって目を合わせた。

「武比古、君の術式は誤った使い方をすれば周りの人どころか全国の人にも危険が及ぶものだ、でもね、その逆にもなり得る。
その力をどう使うかの最終判断は君ものだけど、後悔しない使い方をしてほしい」
「今度こそじゃあね、また会おう」

■■■■

「これが僕とこれから来る助っ人、武比古との出会いだよ」
「へぇ～そんなヤバイ人なのか武比古先輩って」
「そうビビらなくても大丈夫だって悠仁」
来るべく渋谷での決戦に向け五条は虎杖や伏黒達に助っ人の話をしていた。
「でもよ、でもよ、そんな凄い呪力なら宿儺が興味持っちゃうかもしれないじゃん！」
言葉だけではヤバさがわからなかった悠仁は全力で武比古の心配をする。
そんな反応をするのも無理はなく言葉だけではわからない。

「大丈夫、あいつ――

――宿儺より強いもん」

ハジメマシテ

「ほら、噂をすればなんとやら、ってね」
　五条はそう言って目線を悠仁達の後に向けて片手を挙げる。
「おっひさ～武比古。
　また、呪力量が増えたね」
「お久しぶりです、屑野郎。何もしなくても勝手に増えていくのでね」
　久しぶりに会う旧友のように会話を弾ませる二人、しかし五条は心底楽しそうに会話するのに対し、武比古の背後には明王が見えるような気がするほどの呪力が滾っている。
「……五条先生、こちらの方の紹介してください」
（っ！　んだこの呪力量、乙骨先輩よりも多いぞ……！）
「あーはいはい、こちら小野武比古君。恵たちの一つ上の二年、普段は普通の高校に通っててたまに手伝って貰ってる」
「呪術高専の所属ではないんですか？」

「そうそう本人の希望でね。じゃなきゃ暴れるって脅されちゃって」
　てへぺろ☆、とでもいうような擬音が出てくような顔をする五条。
　その表情を見た武比古や呪術高専組は内心、(((キッモ!!)))と心を通わせていた。
「えっと、改めて小野武比古です。この屑に日本がヤバイ危機だって聞いて助っ人で来ました」
「虎杖ゆーじでーす!よろしくおなしゃっす!!」
「伏黒恵…です。あと五条先生に騙されてます」
「釘崎野薔薇、優良物件かと思ったけどただのバカね」
　呪術高専の一年生の自己紹介が終わり、二年生の自己紹介がはじまる。
「禪院真希ヨロシクな」
「しゃけ、おかか」
「このちっこいは狗巻棘、術式の影響でおにぎりの具に語彙を絞ってる、で俺がパンダよろしく」
「うん、みんな宜しくね。あと屑はその顔殴らせろ」
　二年生も終わり一通りの顔合わせは終了した。武比古は内心、クセが強いなー、と思った。
「じゃあみんな本題に入ろうか」

自己紹介が終わったタイミングで五条は武比古以外のメンツに声を掛けた。
「本題って顔を合わせじゃねーの？」
「うん、本来の目的は武比古の術式の説明だよ」
「術式の説明ってそんなもん教えていいんですか？」
「問題ないよ伏黒くん」
術式の説明と聞いて驚く高専組。それもそのはず、術式とは本来他人に開示することなど皆無に等しい行いである。術式を開示しそれが呪詛師に伝われば殺されるリスクが急激に増加する、何のメリットもない行為。
「術式にもね二つの種類があるんだ。一つが種がバレたら終わりの術式。こっちがほとんどね。」
「それと僕や武比古みたいに知られても問題のない術式。君ら僕の術式知ってるけど勝てないでしょ？そう言うこと」
「僕の術式も屑みたいなタイプでね…、と説明するより視てもらった方がはやいかな？」
武比古はそう言って自分の胸の辺りで掌を合わせてこう言った。
「領域展開――――」

■■■■

「理解した？」
　あまりにも特異過ぎる領域展開を目の当たりにし声を失う高専組。
　その中でも一番はやく我を取り戻した伏黒が質問する。
「小野先輩は一般の生まれですか？」
「うん、一般の生まれ。先祖に術師がいたって訳でもないよ」
「一般の生まれであの術式に呪力量……天与呪縛ですか？」
　この質問に少しだけ間を開けながら答える。
「うん、って言いたい所だけど生まれ付きでね、今も勝手に増えていくんだ」
「そう…ですか…」
「でもね、先祖に術師はいなかったけどちょっと逸話のある人物が先祖にいて、多分それが関係してるんだと思う」

乙骨のように菅原道真と同列の日本三大怨霊の誰かかと、我を取り戻した二年生は考える。
「あぁ乙骨くんみたいに日本三大怨霊の子孫とかじゃないよ。ご先祖様の名前は小野篁って言ってね。地獄に行ったと言われる人なんだよ」
予想していたものと違う答えを聞き、?が浮かぶ伏黒と二年生。釘崎は三大怨霊は知っているが乙骨のことを知らないので早い段階から?が浮かんでいた。
虎杖にいたっては何を言ってるのか一つも分からなかったので我を取り戻してから蝶々を追いかける始末。
「小野…篁?誰ですか?」
「あんまり有名じゃないからね知らなくて当たり前だよ。
平安時代にいた貴族で、ある寺の井戸に落っこちて地獄に行ったんだ」
「まぁ小野篁がホントに地獄に行ったかはわからないんだけどね、武比古の術式を僕の眼で見た限り本当に行ったぽい」
目隠しを外して六眼を指差しながら説明する。
聞いたことのない名前の人物を聞き余計に?を浮かべ、その後さらに地獄に行ったと聞きまた余計に?が浮かんだ虎杖を除く高専組。
「多分だけど地獄で料理でも食べたんじゃないかな?料理と言えど地獄を身体に取り込

んだ篁の中に地獄が混じったんだ」
「平安時代には仏教によって地獄が色々な人に知られ初め皆が地獄は恐い場所と認知され始めていた。その恐れが現世にいた小野篁の子孫たちの中にある地獄の卵に溜まっていった」
「時代が経るにつれ人口が増え、子供が増える。子供の親は悪いことをしたら地獄に堕ちるよ、と子供に言い聞かせる。それが今この時代にまで続いてる」
「そしてそれが武比古の代で武比古の中に地獄を生み出すほどまで溜まった」
「それが僕の術式が出来た理由だと僕とこの屑は考えてる。だから僕は一般の生まれでもこんな意味のわからないことになってるんだ」
「なんだか呪霊みたいでしょ?まぁ地獄って基本恐いものだから仕方がないんだよね」

術式の成り立ちを聞き終えた高専組は、そんな滅茶苦茶な理論で術式が出来るものなのかと頭を抱えたが、先程から訳のわからないということしかわからないので、まぁそういうこともあるかと納得した。

■■■■

顔合わせと術式の説明も終わり、明日の渋谷での決戦に備え各々が寮の部屋に帰った頃、武比古は五条を呼びとある喫茶店でお茶していた。
「で、五条先生。さっき伏黒くんが言っていた騙されてます、って本当ですか?」
「うーん…今のところは騙してるかな?…でもね武比古、もし明日僕が死ぬか封印されるか、みたいな僕が身動きが一切とれない事態になると日本全国が本当にヤバい、と僕の勘が言ってるからね」
伏黒に言われたことが気になった武比古は五条に真偽を確かめ、それが今のところ事実であると判明した。
だがそれが明日の決戦で起きてはならない最悪の事態によって引き起こされるとも判明した。
「なるほど…伏黒くん達はそれを知らないんですね?」
「言ったところで何も出来ないからね…」
「僕の役目はその最悪の事態が起きないように先生の援護と皆の援護ですね」
「話がはやくて助かるよ、明日説明する手間が省けた」
明日する自分の役目を確認した武比古はそろそろ帰ります、と言って先にお会計をし

て帰って行った。
　五条はまだ残っているコーヒーを飲み干すと少しだけ悲しそうな顔をして呟いた。
「本当はこんな事を頼みたくないんだけど…頼んだよ武比古」

リョウイキテンカイ

２０：３５　東京　渋谷（〝帳〟内）

『じゃ宜しくね武比古』

五条から言われた時間が迫り、溢れ出る呪力を全身に流す。

掌を胸の高さで合わせて深呼吸をする。

「ふぅ……じゃあ始めるか…領域展開――――

――――獄落浄土（ごくらくじょうど）」

東○百貨店、東○東横店を中心に半径五百メートルを範囲とする領域を展開。地獄に際限がないように武比古の領域にも際限がなく今回は渋谷が舞台なので東○百貨店、東

○東横店までに留めてある。
宿儺の伏魔御厨子と同様に、結界を閉じず生得領域を具現化する、まさにキャンパスを用いずに空に絵を描くに等しい神業。
領域が展開された場所には、渋谷を囲むように赤い川が流れ始め、河原では小石で作られた塔が出来る。
川の内側では空が紅くなり黒雲が現れ始め、角の生えた無数の鬼が呪霊を求めて歩き回る。
結界を閉じず逃げ道を残すという縛りによって、結界を閉じるよりも多くの鬼が現れていた。
しかも本来は人間、呪霊問わず襲う鬼達に対して、呪霊だけしか襲わないように縛りを設けた事により鬼達の基本性能が向上した。
地下に降りれば降りるほど鬼達はどんどん大きく強くなっていく。
一階に降りれば二倍、二階に降りれば四倍と、倍々ゲームのように。
これが小野武比古による史上最大規模の領域展開である。

■■■■

「…やられたね、まさかこの規模の領域展開が出来る術師がいるとは……」
渋谷の地下で獄門疆によって五条悟を封印するために待ち構えていた夏油一行はまんまと武比古の領域展開の中に入れられた。
「この領域どうする、漏瑚？」
「ぬぅんこの呪力…こちらも領域を展開したところで押し負ける…無駄な呪力消費だ」
「逃げ道は閉じてないみたいだから出ることは出来るぽっいね」
「ならば、このまま当初の予定通り進める。よいな、夏油…」
領域が閉じられてないことが判明して余裕が出来た夏油一行。
「あぁそれで問題はないよ。
それでもこの状況はとても良くないんだけどね…あちこちで無数の式神の気配を感じる。
地上にいるのは雑魚ばかりだけど僕たちのいるこの階にいるのは数こそ少ないが特

級に相当する…」

「結界で閉じなくても問題なし、領域を展開しようと思えばすぐに押し負ける、展開されてても簡単に押し勝てる…バケモノだねこの領域の術師」

冷静に領域を読み取りその強さに驚嘆する夏油、またの名を□□。何百年ぶりかの冷や汗を流した。

「まぁ此処でごちゃごちゃ言ってても仕方がないし、さっさと始めようか」

■■■■

「うわーえっぐ、昨日見せて貰ったより凄い事になってんなー」

帳から少し離れたところで冥冥、憂憂と一緒に待機していた虎杖はその場所からでも黙視できるほどの広範囲で展開された領域を見ていた。

「冥さんは先輩のこと知ってたの？」
「まぁね、将来有望なバケモノさ」
武比古と認識があると言う冥冥は武比古の領域展開に特に驚いた様子もなく掛かってきた電話に出る。
「…へぇ。虎杖君、行き先は変更だよ。明治神宮前駅に渋谷のと同じ帳が降りた…私達はそっちに向かう。
彼がいる分、こちらが圧倒的に有利だ。気楽に走るよ虎杖君」
「押忍っ！」

■■■■
２１：１６

「弱い呪霊がちょっといて強い呪霊が何体か。強い改造人間はいないけど弱い改造人間がうじゃうじゃ、か」

「面倒くさいね。虎杖くんが言ってたツギハギの呪霊の仕業っぽいし」
領域を展開し幾分か時間がたった頃、手持ち無沙汰になった武比古は鬼達と視覚を共有して地下の様子を伺っていた。
「虎杖くんが勝った二級呪霊との会話を聞くに、ツギハギの名前はマヒト、真人かな?」
「何階にいる?…五階か、他の特級も五階にいるけど五条先生の相手をしてるのか……真人は虎杖くんに任せて僕は五条先生の援護でもするかな」
両手を地面につけ地下五階に門を開くイメージをする。

「獄門　開　牛頭鬼」
突如地下五階に禍々しい大きな門が現れた。
この門から現れる鬼は武比古が許可しない限り出ることが出来ない。しかも莫大な呪力が必要なため、いくら呪力お化けの武比古でも一日五回までしか召還出来ず、同時に存在出来るのは二体までである。
『聞こえるかい?牛頭』
『ブモォ』
牛頭と呼ばれた門から出てきた牛の頭をした鬼は、頭に響く己の主人の声に耳を傾ける。

『その先に五条先生がいるから手伝ってあげて』
『ブモ』
『頼んだよ』
『ブモォォォォォォォッ!!!』
牛頭は主人に頼まれた任務を遂行するため、前に会ったことのある五条の呪力を感知し、進路の先ある壁をぶち壊しながら真っ直ぐ突進していった。

シキガミ

２１：１９

「おーいやるならさっさとしてくれ、ムサ苦しいうえ眺めも悪い」
獄門彊の術中にはまった五条は、何も出来ないことを確認し偽夏油との一時の間会話を自分が封印されることで終止符を打とうとしていた。
「こちらとしてはもう少し眺めてたいが、何かあってもいやだしね」
「閉「あと後ろに気を付けろよ、もう少しで増援がくるから」…門」
五条が封印される間際にはなった一言で、後ろから来る強烈な気配を感じ取った夏油達は手短かに今後の方針を決める。
「さて時間もないしさっさと決めようか。私はここで獄門彊を見張っているから好きにしておくれ」
後ろの気配を感じ取ると同時に、獄門彊が五条悟の情報を処理するために場所が固定されてしまい暫く動かせなくなってしまった偽夏油達は今後の予定を話し合い始めた。
「なら俺は虎杖悠仁と釘崎野薔薇を殺す、弟たちの仇だ。それが済み次第高専に保管さ

れてる他の弟たちを回収する」
「釘崎とやらはいいが虎杖はダメだ、宿儺にする」
「知るか」
「あ〝ん？」
虎杖ぶっ殺したい派の脹相と、宿儺にする派の漏瑚の間に険悪な雰囲気が流れ始める。
「落ち着いて二人とも、やっぱ俺も虎杖は宿儺にした方がいいと思うよ」
「そうであろう」

脹相と漏瑚の間に入った真人も虎杖を宿儺にしようと提案する。
「五条悟を封印した、けど領域を展開してる術師のことを考えれば、俺達呪霊と術師たちの戦力差は明らかだ。
…でも宿儺が復活すればほぼ勝ち確ってことでしょ？」
「そうなるね」
「じゃあさ、――――虎杖、宿儺にしよ。大丈夫…俺たちなら出来るさ」
五条悟が封印された術師側の戦力を考え、自分たちと明らかに差があると指摘した真人は宿儺を復活させる理由を述べる。

「でも脹相は納得しないでしょ？」
「当たり前だ」
「だからさゲームしよ。俺と漏瑚が先に虎杖と接触すれば宿儺に、脹相が先に接触すれば殺す、それでどう？」
「ふん、それでいい」
「じゃあ、スタート!!」
　真人の提案によって脹相も納得し、若干ぶっ殺す派の有利なゲームが始まった。
　漏瑚以外は一斉に走りだし、獄門疆を見張る夏油はメカ丸の監視を破壊し、先ほどから止まっている気配に警戒を強めていた。
「やられた…！今日はとことん運が悪いな」

■■■■

「そんな感じか…どうしよっかな～」
　援護をしようとした矢先、突然現れた夏油と呼ばれる術師によって五条を封印されてしまい、援護する理由がなくなってしまった武比古は牛頭にストップを命じ、呪霊たち

の会話を隠密特化の式神を介して聞いていた。
「牛頭だけであの前髪に特攻は駄目だろうな、嫌な気配がする。かと言って何もしないのもなぁ…うーん」
「あ、ゲームに参加してる呪霊の中で一番強いのは多分富士山だ。なら富士山の相手を牛頭にさせるか…それが一番安全だろうし他の術師たちに虎杖くんを援護してもえるしね」
富士山頭の呪霊を狙うことに決めた武比古は牛頭鬼に命じる。
『牛頭、聞こえるかい？』
『ブモォ』
『なら、今動いた中で一番呪力量の高い奴を倒してきて』
『ブモォ！』
ジッとして溜まった鬱憤を晴らすべく先程以上のスピードを出して目的に一直線に向かっていった。
「にしても獄門ね…」

■■■■
２１：３０

「まったく、五条悟を狙って獄門疆に集まってくるというのに…馬鹿どもが」
真人たちと離れ一人虎杖を探している漏瑚。歩いている場所がどこかもわからず彷徨っていた。
「それにしても此処はいったいどこだ?それにこちらに近づいてくるこの気配、来るならさっさと来るがいいィ!」
そう言った直後―左側の壁が破壊され、己に匹敵する呪力量を擁する式神が現れた。
その式神は真っ黒な身体に自分の三倍はあるかというほどの巨体、極めつけはその顔、完璧な牛である。
牛の呪霊と呼ばれても仕方がないほどの牛面であった。
「貴様か、先ほどから儂を追いかけていたのは」
「ブモォ」
「喋れぬか…式神だから仕方がないとも言えるが…まぁ関係のないことだ、これから起こる事においては、なッ!!」

フジサン

燃えるような呪力を滾らせる漏瑚、それに対して息を荒くさせ全身に呪力を纏わせる牛頭。

「大方、儂を殺せとでも言われておるのだろう…ならば殺し返し貴様の主人も焼き尽す！」

漏瑚の放った言葉に対して心底バカにするような笑みを浮かべる牛頭鬼。

「貴様ァなんだその笑みは、儂をバカにしておるのか？儂には殺されないと思っているのか？ナメるなよ、式神がァ!!」

火礫蟲

漏瑚の呪力から産み出された虫によく似た、無数の小型の呪霊は一直線に牛頭鬼に向かって飛んで行く。

牛頭鬼は飛んできた火礫蟲を振り払おうと、その丸太のように太い腕を振るう。

しかし、振り払おうとした瞬間、大音量の奇声を発しその声に牛頭鬼は怯む。
そして火礫蟲は奇声を発した後一斉に大爆発を起こした。
「ふん、これ一体どれ程のダメージを受けたか……さっさと来い！どうせロクなダメージを受けておらんだろう！」

黒煙が晴れたあとにいたのは、呪力によって全身を護り殆どはダメージを受けていない牛頭鬼であった。
「ブモォォォォォォォォ!!」

腕を振り上げながら凄まじいスピードで漏瑚に突っ込んで行く牛頭鬼。

（な?!一瞬で儂の目の前に?!避け、きれん！）

余りのスピードに避けきれず、間一髪両腕を顔と拳の間に入れることが出来たが、拳を受けた両腕はひしゃげ、そのまま顔に叩き込まれ壁まで吹き飛ばされた。

「ゴボォォォォァォアア!!」

（侮った……！所詮式神と、術式も持たぬ傀儡と侮った!!何という破壊力…！スピード！このままでは勝てぬ、相性が悪すぎる！こうなれば外に出て直接術者を叩く……！）

壁に埋もれ、血？を盛大に吐いたあと一切動かない漏瑚。

牛頭鬼は漏瑚の呪力を感じ、力尽きていないと油断せずに身構える。

突然漏瑚の呪力が増大し、超火力で一気に地上までの通り道が作り出される。

「……儂は貴様に勝てん…ならば貴様の主人を殺して、他の呪術師を鏖殺する」

牛頭鬼に対してそう放った後、少しでも時間稼ぎをしようと自分の術式で煙幕を張り、足から炎を吹き出して地上に直行した。

「ブモ」

牛頭鬼はそれを見届けた後少し憐れみを宿した眼を向けて、何事もなかったかのように他の呪霊がいる方に歩いていった。

■■■■

「追って来る気配がない？……何であろうと好都合、このまま殺すッ！」

牛頭鬼の呪力が自分から遠ざかるのを感じ、少し考えたあと問題無しと判断し武比古の方向まで猛スピードで走っていた。

そして武比古を目視出来る範囲に入っていくと、その呪力を漲らせ領域展開以外の術

式の最高とも呼べる技を繰り出した。
「極の番『隕』！」
（これで終わりだッ！死ねェェェェェェ！）

超高層ビルにも匹敵するほどの超巨大隕石を自分の術式で顕現させ、それを武比古に目掛けて落とした。
超巨大隕石は周りにあるビルも破壊していき、もう走っても避けきれないほどの距離まで近づいていた。

「そっちが極の番を使うなら僕も使わないと不公平だよね」

ナラク

「極の番　『奈落』」

宙に浮いている漏瑚と隕石の真下に巨大な穴が出現した。

「な、なんだ?!」

「じゃあね―バイバイ」

穴に吸い込まれるように落ちていった漏瑚と隕石。

その穴の底には頭が馬で身体が少し細い牛頭鬼とよく似た体型の式神がいた。

「せいぜい足掻いてよ。どうせ死ぬけど」

さて、あとは三匹か。

今のヤツほどではないけど、強いのが残っているな。牛頭を向かわせるか…いやそろそろ時間か。

ま、どうにかなるでしょ。

■■■■
２１：４９

「終わったのかい？馬頭」
『はい』
漏瑚を祓い終えた式神の一体、馬頭鬼が僕の元へ帰ってきた。
馬頭は牛頭に比べ身体能力は劣るが、その分頭が良く回る。
そのため言葉を話す。

「強かった？」
『ええ、ですが相性が悪かったです。私は獄卒、炎の耐性が高いため彼の炎もさほど効き

ません。あまり楽しめませんでした』
「そうか残念だったね」
『はい。それとこれを拾いました』
　馬頭はそう言って五本の宿儺の指を渡してきた。
「これは…！良くやった馬頭、もう戻ってくれていいよ。また呼ぶかもしれないけどね」
『はっ』
　馬頭は足元に現れた黒い穴に吸い込まれるように帰っていった。
「さて…残りはどいつが持っている？」

　渡された指は持ち運ぶため専門に作られたであろう物に包まれていたが、それには空いた場所が五つあった。
　つまり残っている呪霊三体の内、一体もしくは二体それか、三体が分けあって持っていることになる。

「領域内では呪力の探査が落ちるんだよなぁ」

■■■■

「やっと見つけた…」

領域内では無数の監視役の式神を放つために縛りをかしているため、呪力を探す精度が極端に落ちる。

宿儺の気配が強くなったことでようやく見つけることができた。

「うわっ、目覚めてるし」

急に多くの指を取り込んだら一時的に主導権が宿儺に渡るって先生が言ってたから指の回収をしてたのに間に合わなかったか。

「会いたかったぞ小僧…」

「僕は会いたくなかったよ宿儺」

「ククククク…この俺の全盛期であったとしても呪力の多寡では負けるな、やはりオモシロイ」

「で、どうするのさ。そんなに呪力滾らせて主導権が戻るまで僕とお話しするのかい？」

「ふむ…それもまた一興ではあるが……ご馳走が目の前にあるというのに我慢するわけ

ないだろう？」
「じゃあ、やろうか――」

「へぇ、やっぱり宿儺と張り合うのか。いくら完全じゃないとはいえ五条悟以外にもいるとは思わなかったな」

五条悟を封じ込めた獄門疆を動かせるようになるまで見張り続けていた夏油傑。
「まったくこんな厄介な奴、自分一人の秘密にするのは勘弁してくれないか。知っていれば真っ先に殺したのにさ」
足元に存在する元凶とも呼べる男に向けてそう呟いた。

「ハハハハッ!!楽しいな、小野武比古!」

僕の鳩尾目掛けて飛び蹴りをかましながら宿儺が話し掛けてきた。

「いやいや楽しくないでしょ、こんな術式も使わない肉弾戦」

当たる直前の蹴りを右手で掴み、空中で蹴りの体勢のまま止まっている宿儺を建物のある方に投げ飛ばす。

「ほう‥?術式を使った闘いが好みか」

「そうさ、肉弾戦なんて先生との組手で飽きてんだ。術式使うと周りの被害が凄いから使わないしね」

「フフフ‥ならばここからは望み通りにしてやろう」

瓦礫から出たきた宿儺は指を二本、僕に向けて構えると――

「――解」

無数の見えない斬撃を飛ばしてきた。

「へぇやるじゃん宿儺。久々に怪我しちゃったよ」
解を受けた僕の身体には無数の斬り傷がつけられ、いたるところから血を流していた。
「ハッ！並み術師なら今の細切れになっておるわ。それにお前程の術師が反転術式を使えぬわけでもない」
「ま、その通りだね」
反転術式ですべての傷を治していきながら僕も宿儺に向かって構える。
「じゃ次は僕の番だ――」